

授業への自信と意欲を高める生徒指導主事による コンサルテーション

－ 若手教員への継続的な支援を通して －

学籍番号 209103

氏 名 池嶋 一隆

主指導教員 家近 早苗

1. 問題と目的

実習校の課題は教員の平均年齢が34歳と公立中学校の平均年齢43.9歳よりも約10歳若く、「自分の授業に自身がない」と感じている教員が全体の半数程度いることである。また実習校では月に一回の研究授業が実施されているものの、実態はこれまで行ってきたことを継続的に行っているだけであり、授業者にとって欲しい情報が得られることが少なくなっている状態であった。さらに、生徒の学校適応感調査の結果から、実習校の生徒は学習への適応感が低いことで生活の満足感が低下しており、教員の授業力向上が課題解決のために必要であると考えられた。そこで本研究では、若手教員を中心とした実習校の教員の授業力向上のために、生徒指導主事がミドルリーダーとして何をすべきなのかを明らかにすることを目的として、実践を行うこととした。

2. 実践研究の内容

【研究I】 若手教員を対象にした実践

[目的] (1) 先行研究や報告者の過去の授業観察の結果を用いて、若手教員の授業観察の際に焦点を当てるべき点を整理する。(2) 報告者が若手教員にどのような授業のアドバイスを行っていたかを明らかにする。(3) 報告者から授業のフィードバックを受けていた若手教員がどのようなことを感じていたかを把握する。

[方法] (1) 期間：2020年4月～2021年3月 (2) 対象：実習校の若手教員6名、報告者が授業のフィードバックの際に活用したシートに記入されていた項目 (3) 方法：①協力者6名の授業を週に1回見学し授業後にフィードバックを行う。②その際に活用したシートに記入した報告者のアドバイスの内容を意味内容の近いもので分類し、各カテゴリの関係性を検討する。③協力者に半構造化面接を実施し、協力者に起きた変化について検討する。

[結果・考察] (1) 授業観察の際、「生徒指導的スキル」「全教科共通の指導スキル」「教科専門的な指導スキル」の3つの視点で授業に焦点を当てることを設定し、57回の授業見学を行った。(2) 報告者が若手教員への関わりを「修正点・改善点の指摘」「新しいアイデアと方法の提供」「工夫や努力を認める・褒める」「自己認知を促進する」「挑戦の後押し」「教師と生徒が快適に授業を進めるための土台」の6つの大カテゴリに分類した(3) 協力者に起きた変化として、「自信の向上」「挑戦する意欲の向上」「自分を知る」「同僚性の高まり」「修正点や改善点の把握」の5点が示唆された。これらはコンサルテーションの機能と同様のものであり、報告者から協力者にコンサルテーションが行われていたことが示唆された。

【研究II】 若手教員を含む実習校全体の教員を対象にした実践

[目的] (1) 研究Iで行った授業を通じた若手教員への関わりを知見を校内全体に普及する。(2) 研究主任1年目の教員の分掌運営のサポートのために、ミドルリーダーができる支援

について検討する。（3）実習校の教員の授業力を向上させる。

[方法]（1）期間：2021年4月～2021年12月（2）対象：実習校の教員26名、研究主任、研究部、報告者が研究主任に行った関わりの記録、授業研究の内容（3）方法：①研究部、研究主任と校内研修の計画・改善を行う②研究主任との関わりの記録から若い研究主任の抱える問題に報告者が関わった事例を検討する。③実習校の授業研究を改善し、その効果を教員へのアンケートを用いて調査・検討する。

[結果・考察]研究部と連携し2回の校内研修を行い、各教員に内在化していた授業の課題を言語化し、他の教員と共有した。また、研究主任への5つの関わりの事例を検討し、若い主任を育成するためには5つの要素「実践計画を校内に広げるための補助」「資料作成や研修の構成についての知識の提供」「年上の部会の成員への気遣いを感じ取る」「校内の教師の負担感に気づかせる」「情緒的サポートを増やす」が必要であることが示された。生徒指導主事が校内の授業力向上に携わるには研究主任へのコンサルテーションと研究部への関わりを同時に行うことが必要であると考えられた。

3. 総合考察

本実践研究では、生徒指導主事がミドルリーダーとして校内の授業力向上に取り組む際には、若手教員の育成として授業を通して関わりを行うこと、校内全体の教師に影響を与えるために研究部と連携とを行い、若い研究主任の育成を行うことが重要であることが示された（図1）。若手教員に自信や意欲を持たせるために授業を指導する側は（1）授業力向上が生徒指導機能の向上であるという意識を持つこと、（2）教員ごとに求めている知識やスキルが異なることを理解して関わること、（3）自分の行っているアドバイスの種類を認知すること、（4）授業者の狙いや工夫を汲み取る視点を持つこと、（5）定期的かつ継続的に行うことの5点が重要であると考えられる。また、研究部との連携によって授業研究の趣旨を校内に浸透させることと、若手研究主任の育成を同時に行うことが校内全体の授業力を高めるために必要であると考えられる。これらの生徒指導主事の関わりによって、実習校の教員が互いの授業のニーズを把握し、それを意識した授業研究を行ったことで他者の授業へのアドバイスの質が向上したと考えられた。また、授業研究を通して教師の意識や態度が変化し、生徒への援助サービスが向上した可能性があることが示された。

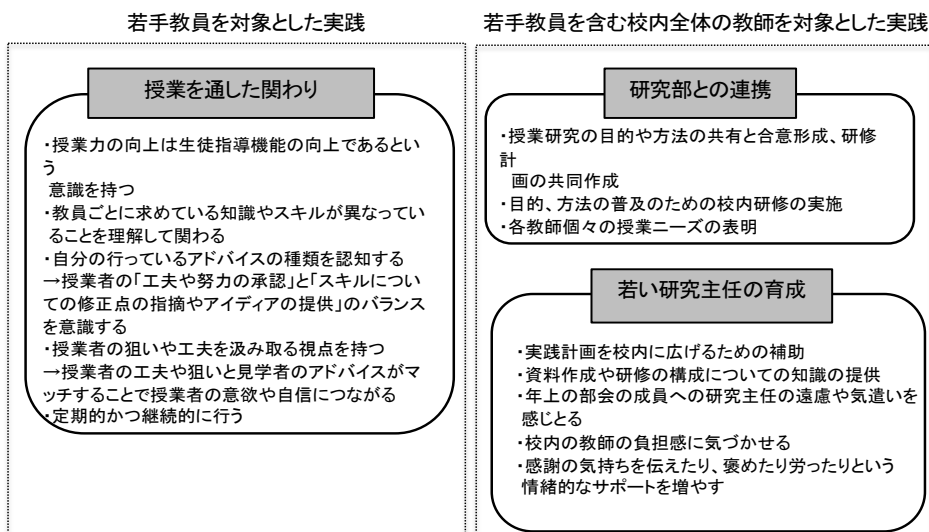


図1 ミドルリーダー（生徒指導主事）が校内の授業力向上のためにできること